

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第二十四主日 C 年

小西広志

2022 年 9 月 11 日

朗読箇所

第一朗読 出エジプト記 32 章 7-11、13 - 14 節

第二朗読 テモテへの手紙 1 1 章 12-17 節

福音朗読 ルカによる福音書 15 章 1 - 32 節

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 9 月 11 日、年間第二十四主日となっています。今日の三つの朗読をシノドスの教会の観点から読んで味わってまいりましょう。

福音朗読に集中しましょう

『ルカによる福音書』15 章には三つの物語、つまり「見失った羊」、「無くした銀貨」、「放蕩息子」の物語があります。

『ルカによる福音書』の作者はある一つのパターンに沿って福音書を編んだようです。それは 1. イエスさまの行動、2. イエスさまへの非難と攻撃、3. イエスさまの応答です。そうしますと、今日の朗読箇所の冒頭でファリサイ派と律法学者たちがイエスさまを非難する役目で登場しますから、この部分（1-3 節）は作者による編集箇所と考えられるでしょう。また、15 章の三つの物語は「回心」というテーマに基づいて並べられたと思います。しかし、羊も銀貨も、息子（弟）も回心したわけではありません。7 節と 10 節にある「言っておくが」で始まる箇所はやはり作者による編集箇所だと思います。

さらに「放蕩息子」の物語での息子（弟）の独り言（18-19 節）は父親に会ったときに何を話すかを考えたら生まれた言葉だとしたら、この息子（弟）が回心したとは言えないでしょう。ですから、「いなくなっていたが見つかった」と二度登場する箇所（24b 節、32C 節）もまた作者による編集かもしれません。これらの部分（7 節、10 節、24b 節、32C 節）を取り除くと、よりイエスさまが語ったオリジナルに近くなるのではないかと思います。

しかし、わたしたちは聖書のことばを「神のみことば」として受けとめますから、仮に編集の手が加えられていたとしても、聖書のテキストをそのまま受けとめることにしましょう。

今週は第一朗読と第二朗読を省略して福音朗読の部分だけに集中します。福音朗読も長いので、「見失った羊」、「無くした銀貨」についてお話しします。『知恵の書』9章は知恵を求めるソロモンの祈りです。

百匹の羊

「見失った羊」のたとえの冒頭ですが、この節は修辭的な疑問文となります。「あなたがたのうち一体どんな人が、……こうしないだろうか?」、当然、聞き手や読み手は「そうだ。当然そうする!」と答えるような文章の構造です。強い共感や強い同意を求める語り出しです。「持っている人がいて」の「持つ」はギリシア語でエコーですが、これは「所有する」ではなく、羊の世話の「責任を任されている、責任を負っている」の意味です。百匹の羊を持っている人は裕福な人です。そんな人は羊の番という卑しい仕事をせずに、雇った人々に羊の番をさせました。しかも、一人で番をしなかったそうです。二、三人で番をしました。そうすると、このたとえ話が語っているのは、百匹の羊を飼う金持ではなく、仲間と一緒に実際の羊の番をしている貧しい人々です。

一匹を見失ったら

次に4節の「一匹を見失ったとしたら」に注目してみてください。

「失う」を意味するアポッリュミの能動態の過去分詞形が使われています。これは見失った羊飼いの責任が問われる書き方です。「九十九匹を野原に残して」は、上に書いたように仲間と一緒に羊の世話をしているので可能となります。そうすると、一人の羊飼いが一匹の羊を見失ったことに気づき、責任を感じて探し始めたのです。

見つけ出すまで

引き続き4節の言葉「見つけ出すまで」を見てみましょう。

このあたりを少し直訳調に訳してみると「いなくなったものに向けて出かけていかないだろうか、それを見つけるまで?」となります。「いなくなったものに」は先ほどのアポッリュミが使われています。不思議なことにここでは現在完了形です。羊飼いは「羊が一匹いない」と能動態で気がつきます。そして責任を感じます。しかし、ここでは現在完了の形にして、「いなくなった」という意味が強調されています。「捜し回らないだろうか」はギリシア語でポレウオマイですが、これは遠くへ旅に出るという意味あいです。そうしますと、この羊飼いは一匹を探してあちこち移動したのです。その頃の習慣では見つけた羊が仮に死んでいたとしても、死体を持ち帰ったそうです。それほど、羊のことを気にかけていたのです。

一緒に喜んでください

「一緒に喜んでください」という 6 節の言葉を味わいましょう。

見失った羊を見だし、羊も羊飼いの無事に帰ってきたのは、周りの人も巻き込んでの大きな喜びの体験です。「友達」(フィロス)、「近所の人」(ゲイトン)も男性の複数形です。男性だけの喜びの集まりだったとも考えられますし、もしかしたら近所の人をすべてを男も女も子どもたちも呼び集めたのかもしれませんが。「呼び集めて」はシグカレオ、「一緒に喜んでください」はシグカイローとギリシア語でいいますが「一緒に」を表す接頭辞であるシンが使われる合成動詞です。

このたとえば「そうだ、当然そうする」という答えを引き出すための修辭的な疑問文で始まります。大切なものをなくしたら見つけるまで探し出す。見つけたらみんなで一緒に喜ぶ。「当然そうしますよね!。そうじゃありませんか?」という主張が隠されているたえではないでしょうか。

ドラクメ銀貨を十枚

今度は「無くした銀貨」のたえ話に移りましょう。

このたえ話も修辭的な疑問文で始まります。「一体、どんな女性が…しないだろうか」と呼びかけられて、聞き手、あるいは読み手は「当然そうする」と強い共感、強い同意を引き出す文章です。

ドラクメ銀貨はおよそ 3.5g の銀貨です。ローマの貨幣単位のデナリと同じです。1 ドラクメは成人男性の一日分の賃金ですから、10 枚とはけっこうな価値です。なぜ 10 枚のドラクメ銀貨をこの女性が持っていたかは不明です。想像するしかありません。ドラクメはこの女性の結婚の持参金であり、衣服に装飾品として縫いつけていたのだらうと解釈していますが、それは近代的な中東の習慣であり、しかもベリーダンスを意識しているとしてフェミニズムの観点から山口里子先生は斥けています。

銀行のない時代ですから家のお金の管理は女性に任されていたそうです。銀貨が一枚失われたら（ここでもアポリューミが使われます）、その女性の責任です。自分でそれを弁償しなければならなかったそうです。そうなるを見つけ出すまで探すのは当然なことでしょう。女性は苦勞して、探し続けたのです。

家を掃き

8 節の「家を掃き」に注目してください。

昼なお暗い庶民の家ではランプの油は必需品です。それは高価です。それを灯して、探し始めるのは探し出すとする決意の表れです。床を掃くためのハウキはナツメヤシの枝できていたそうです。ナツメヤシは栄養価の高い実をつけることから、いのちの木と考えられていました。古代メソポタミアではナツメヤシは女神の象徴だったそうです。そんなナツメヤシの枝でできたハウキで掃くのは何か象徴的な意味を感じさせます。

一緒に喜んでください

先ほどと同じ表現「一緒に喜んでください」が登場しています。

ここでの「友達」はフィリアスですから、女性形です。前のたとえと対照的になります。女性たちは、お互いに支えあうようなネットワークをもっていたと考えられます。ですから、見つけたら「呼び集めて」、「一緒に喜ぶ」のは当然なことでした。ここでも前のたとえの動詞が繰り返されています。

そして、前のたとえと同じように「当然そうしますよね！。そうじゃありませんか？」の主張が隠されているのです。

まとめ

実は、わたしは羊を見つけてなぜ一緒に喜ばなければならないのか、銀貨を見つけてなぜ一緒に喜ばなければならないのか、長い間疑問でした。今回、改めて三つのたとえ話、つまり「見失った羊」、「無くした銀貨」、そして「放蕩息子」を読んでみて、なるほどと思ったことがあります。つまり、この三つのたとえ話は回心とかの話ではなく、「一緒に喜んでください」の話なのです。イエスさまのたとえ話を聞いていたのは貧しい人々でした。一匹の羊がいなくなれば、当然捜しに行くのです。でなかったら、主人から盗んだと疑いがかけられるからです。銀貨一枚を無くした奥さんは必死に捜すのです。なぜなら、旦那さんから盗んだらと疑いがかけられるからです。そして、見つけたらみんな喜びあいます。よかったね。疑いが晴れて。よかったね。これで旦那から暴力を受けることはないね。と口々に言いあいながら、羊飼いの奥さんも、共同体の中で生きています。その共同体はお互いに喜びあう共同体です。「放蕩息子」の話も喜びの視点から読めます。一緒に喜んであげたいお父さんです。なぜなら、弟は死んだのに生き返ったからです。そして、お兄さんは喜ばません。「喜び祝うのは当たり前ではないか」は、強い修辞疑問文だとも思います。当然、喜びのです。「放蕩息子」の本当のタイトルは「喜ぶ父と、喜べない兄貴」と言ってもよいでしょう。

教会は喜ぶところです。「一緒に喜んでください」とお互いに願いあい、本当に一緒に喜びあうのです。それこそがシノドスの教会といえるでしょう。

それではまた来週。